

編集長インタビュー

和田人事企画事務所 人事・賃金コンサルタント/社会保険労務士
人事書評家

和田泰明さん



「人材ビジネスの現場と本の世界を、行き来する」。
「コンセプトチュアルスキル(概念化能力)は
その行ったり来たりの中で養われていきます」

人事・賃金コンサルタントとして活躍している和田泰明さんは、広告代理店の人事部長も経験した人事のプロフェッショナル。和田さんへの取材は人事専門誌「月刊人事マネジメント」の2012年8月号以来であるから、6年半ぶり。複数の人事系媒体に書評を連載する「人事書評家」としての顔を持つ和田さんには、以前から人材ビジネスで働く人が「ぜひ読んでおきたい、この10冊!」といった趣旨のインタビューをお願いしたいと思っていた。今回、それが実現する運びに。人事異動や新入社員を迎えるこのタイミングに、人材ビジネス業界人にお勧めの本とその読書術を伝授してもらおう。
(インタビュー・構成 伊藤秀範)

書評を書くことは「振り返り」

具体的な本の紹介に入る前に、和田さんが主に人事パーソン向けに書評を書き始めた経緯について触れておきたい。学生時代から読書好きだったという和田さん。それは社会人になってからも変わらなかったが、「読んでいる割には記憶に残っていない」という悩みも。以来、読書で得たことを記憶に残しておこうとノートに書きつづり始めた。「ところがいざ、書こうと思っても書けない。これは意識的に書くためのトレーニングをしたほうがいいのかな、と始めて始めたのが書評です」と振り返る。

「書評を書くということは振り返りの作業でもあります。ただ本を読むというだけではなく、振り返ってそれを記録する。振り返るには、読むために要した時間とは別に、さらに多くの時間を要します。3冊の本を読んだ後に振り返りをするだけで、もしかすると5冊の本を読むだけの時間を費やすことになるかもしれません」。

しかし、その振り返りという工程を踏むことにより、自分の中にその3冊の本の知識が残ります。同じ時間内に5冊の本を読んでその多くを忘れてしまうよりは、振り返りをして3冊の知識をしっかり自分の中に入れていく。そのほうが効率がいいという実感が、自分の中

「5冊の本を読んでほとんど忘れてしまつよりは、振り返りで3冊の知識をしっかりため込んでいく」

にはあったのです。最初のうちは勝手にそう信じてやっていたところもありますが(笑)、振り返ってみるとそのお陰で本の知識が蓄えられ、仕事にも活かしているというわけです」

コンセプトチュアルスキルを養う

コンセプトチュアルスキル(概念化能力)。インタビューの中で和田さんが何度も口にしたキーワードである。

「例えば難解な専門書を読破して理解する。それはそれで読書の楽しみ方ではありますが、読書におけるコンセプトチュアルスキルはそれとは異なります」。

読書におけるコンセプトチュアルスキルとは、例えば難解な専門書から得られたエッセンスを、現実の目の前の世界で起きていることに置き換えて、それを仕事なり、生活なりに生かしている力です。もちろん人材ビジネスの現場で感じたことを理論化するために本に立ち返ることもあります。要するに木から森、森から木というように本の世界と現実の世界を行き来する。その相互作用により、使える知識に変えていける。それがコンセプトチュアルスキルなのです。例えばよく大学の先生の講義などで、確かに

理論としては素晴らしいのだけれど現実感が無い、聴いている人たちのイメージが湧きにくいというケースがあります。

それは経営論に関する難解な分厚い専門書に埋もれた研究室に毎日いても、勤務経験や会社経営の経験もない場合だと、そうした本の世界と現実の世界を行き来するコンセプトチュアルスキルが養われにくいことも関係しているのかもしれない。

日々、現場で忙しく働いている人は、なかなか読書に時間は割けないというケースも少なくないと思われれます。

ただ、その中で日々、感じている日々の悩みや課題について、人とのコミュニケーションの中で解消していくのと併せて、ちよつとハードルが高いと感じるような専門書と向かい合う機会をあえてつくってみるのもいいと思います。自らのコンセプトチュアルスキルは、現場と読書の相互作用によって伸ばしていけます」

読み手にとっての「原典と解説書の違い」

一方で同じ読書でも原典とその解説書とでは、読む側に求められる知識、エネルギーには大きな差があると思われる。

「読書のきっかけとしては解説書、入門書でもいいのではないかと思います。解説書を読む